

槇尾川ダム 意見陳述

意見陳述者

先ほどこの資料（治水効果図）を渡してもらったわけですが、治水計画に対する反対論者ではありません。私は今お見えのどなた様よりも槇尾川の影響を大きく受ける者ですから、よって『槇尾川治水ダム建設計画』（以下本計画という）より、府民の生命と財産を守ると謳われた美しいベールをはがして、計画のカプセル内容を3項目に分類して、真相究明の意見陳述をいたします。

まず「第1項目」に、本計画の契機と提示されたる昭和57年8月第10号台風時の槇尾川を原因とする浸水家屋数については、第1回目は53戸が、第2回目530戸に10倍増されています。和泉市議会での質問に対する答弁、和泉市下水道部理事S氏が、約18年前の当時の様相を鮮明に記憶していたとして、上司と協議をし、53戸より530戸の方が正確であると判断したとのことでした。

しかし、その直後、（答弁記録の11ページ後方）には、当時の状況の中で鮮明な調査はできかねると、自らの先の答弁を覆しているのです。しかしながら、この改ざんされた530戸の資料が、平成11年度再評価委員会（資料2-1の第1ページ）に掲載されています。

更なる不可解には、その裏面の第2ページに驚くべき昭和57年8月3日付浸水被害状況、和泉市建設部下水道課調査資料の記録が存在していて、掲載されています。

この公的記録によりますと、1番、農業用水の満杯による405戸（76%）の全ては、取水堰と排水口の閉開管理の徹底で解決すべき問題です。

2番、川からの逆流による127戸（23.8%）は、その区間において流下能力を上げるか、または川床を下げるか、水路を上げるかして、高低差をつくって解決すべき問題です。

3番、槇尾川増水による厳密なる被害とは、記号47、神田橋周辺の堤防決壊による浸水1戸（0.2%）のみです。換言すれば、ダム計画の契機となしたと提示の浸水家屋数530戸が、厳密には1/533（0.19%）であって、529戸（99.8%）が虚偽であり、計画契機の論旨の99.8%が破綻しているとの証です。

「第2項目」、本計画の根拠として、100年に1度の確率降雨強度86.9mm/h =

計画最高降雨強度における治水基準地点（板原合流地点）での基本高水流量 $750 \text{ m}^3/\text{s}$ と提示され、計画高水流量 $700 \text{ m}^3/\text{s}$ の差 $50 \text{ m}^3/\text{s}$ の治水対策だと提示されています。

しかし、私は『新版流量計算法』（本田・荻原共著）を参考にして、同基本高水流量を算出したところ、牛滝川で $529 \text{ m}^3/\text{s}$ 【 1 】（約 $600 \text{ m}^3/\text{s}$ ）、槇尾川で $698 \text{ m}^3/\text{s}$ （約 $700 \text{ m}^3/\text{s}$ ）、合計大津川の基本高水流量が $1,300 \text{ m}^3/\text{s}$ となりました。よって、槇尾川は $700 \text{ m}^3/\text{s}$ との主旨で、『槇尾川治水ダム計画見直し上申書』を現知事あてに郵送いたしました。その回答によると、中安・単位図法による計算値、 $710 \text{ m}^3/\text{s}$ を $750 \text{ m}^3/\text{s}$ に丸めた、つまり $40 \text{ m}^3/\text{s} = 5.6\%$ 強切り上げたとのことでした。

丸めた理由として、一般的に治水計画では、計画流量を定める際に、安全な計画を策定するという観点から、計算で得られた値の端数は、一定の単位で切り上げて整理することになっている。端数整理の目安は、流量が $300 \text{ m}^3/\text{s}$ から $1,000 \text{ m}^3/\text{s}$ の間については、 $50 \text{ m}^3/\text{s}$ 単位で丸めることとしている。千田稔著書『実用河川計画』参照とのことでした。その引用主張の著書、第 75 ページ末から 76 ページには、全くそのとおり記されています。しかし、この説は、あくまでも計画高水流量に対するもので、特に安全策の観点を重視した措置に注目すべきで、争点は基本高水流量値であって、これを幾ら切り上げて、安全策には繋がる術がなく、その論旨から不実な虚偽解説が明白です。さらに、殿原井堰より光明池への取水による減量があります。【注 1】

「第 3 項目」、本計画の効果として、計画ダム地点において 1/100 年確率降雨強度 $86.9\text{mm}/\text{H}$ の基本高水流量 $85 \text{ m}^3/\text{s}$ と提示されています。しかし、一般的な算出式では $62 \text{ m}^3/\text{s}$ で $23 \text{ m}^3/\text{s}$ （37%）も過大です。降雨強度に換算しますと $120\text{mm}/\text{h}$ となって、 $33\text{mm}/\text{h}$ （約 38%）も過大となっています。【注 2】

$85 \text{ m}^3/\text{s}$ の提示は明らかに本計画に反する不実な虚偽提示です。計画ダム流域面積が、狭すぎるとの認識の欠如です。

大阪府は、同 $85 \text{ m}^3/\text{s}$ の算式について中安単位図法によるものとの回答ですが、中安式は一般算式に比べて集水地点から目的到達地点までの P T 値が低く算出され、流出率 P 1 値も高く算出する特性があります。しかしながら、集水地点（ダム地点）での基本高水流量の計算では、目的地点までの P T はゼロであるから、当然に中安方式の特性を要せず、また用いる術もないから、中安方式の主張は論外となります。

3番、流域面積（集水面積）の一番狭い場所にダム建設計画をなして、一番に治水効果があると尤もらしく提示されていますのが、集水面積と集水降雨量が比例するもので、常識の欠如も甚だしく、学校教育上もよくないと思います。計画ダム地点の基本高水流量 $62 \text{ m}^3 / \text{s}$ を $85 \text{ m}^3 / \text{s}$ に捏造のからくりは、『本計画の根拠となす治水基準地点での $50 \text{ m}^3 / \text{s}$ の治水目的』があり、これにダム地点より目的地点までの流出率 0.68% （つまり損失率 0.32 ）だから、到達地点では $51 \text{ m}^3 / \text{s}$ となります。この $81 \text{ m}^3 / \text{s}$ から（ $10 \text{ m}^3 / \text{s}$ 引いて）、自然放流を引いて、それに 0.68 を掛ければ $51 \text{ m}^3 / \text{s}$ となって、治水ダム計画論旨 $50 \text{ m}^3 / \text{s}$ を前提に考えると、最低極度値の捏造だと考えられます。【注3】

仮に $85 \text{ m}^3 / \text{s}$ と同じ降雨強度を父鬼川流域に用いたとすれば、父鬼川から $515 \text{ m}^3 / \text{s}$ 、ダム流域から $85 \text{ m}^3 / \text{s}$ 、合計 $600 \text{ m}^3 / \text{s}$ となり、府の提示の大川橋から基本高水流量 $400 \text{ m}^3 / \text{s}$ に対してますます矛盾が増して、合理性を欠く結果となります。【注4】

計画ダム地点の地元では本計画を推進されているようですが、ダム直下の大川橋においては、現況で $50\text{mm}/\text{h}$ 対応です。計画ダム流域では $35.4 \text{ m}^3 / \text{s}$ 、基準になるのは $214.6 \text{ m}^3 / \text{s}$ で、約 $215 \text{ m}^3 / \text{s}$ 、合計 $250 \text{ m}^3 / \text{s}$ で流下能力と同じになるわけです。【注5】

おおむね 15 年後に本計画ダム建設計画をなしたところで、 $56\text{mm}/\text{H}$ の対応にしかならない。つまり $6 \text{ mm} / \text{H}$ の効果にしかありません。計画ダム流域では、 $56\text{mm}/\text{H}$ では $40 \text{ m}^3 / \text{s}$ 、ここから $10 \text{ m}^3 / \text{s}$ の自然放流と父鬼川の $240 \text{ m}^3 / \text{s}$ と合わせて $250 \text{ m}^3 / \text{s}$ 、つまりこれだけの効果しかないものに、ダムが一番効果があると説明されているわけです。【注6】

地元の皆さんは、正当なる情報を知らされていないから、美しきベール、生命と財産を守ってもらえるものだと過信して、早期着工の陳情署名に駆られているものだと思います。 $62 \text{ m}^3 / \text{s}$ の治水をされても、なお $133 \text{ m}^3 / \text{s}$ 、ダム治水量の 2.14 倍強の【2】超過ですから、みんなで安全な治水効果のある対策を考えてはどうでしょうか。【注7】

総括として、第1項目の本計画の契機、第2項目の計画の根拠、第3項目の計画の効果、全て不実な虚偽提示によるもので、治水効果もほとんどなく、費用対効果など論じられる道理がないと思います。よって、本計画を破棄して、より安全性の高い、治水効果の高い治水対策に変更されることを要望して、終わらせてもらいます。

意見陳述者からの陳述内容の修正等の申し出について

●数値の修正について（2箇所）

<p>【※1】 P 2 5行目 (誤)「・・・、牛滝川で $529 \text{ m}^3/\text{s}$・・・」 (正)「・・・、牛滝川で $592 \text{ m}^3/\text{s}$・・・」</p>
<p>【※2】 P 3 23行目 (誤)「$62 \text{ m}^3/\text{s}$の治水をされても、なお $133 \text{ m}^3/\text{s}$、ダム治水量の <u>2.14</u> 倍強・・・」 (正)「$52 \text{ m}^3/\text{s}$の治水をされても、なお $133 \text{ m}^3/\text{s}$、ダム治水量の <u>2.5</u> 倍強・・・」</p>

●流量等の算出の根拠を明確にするための算出式について（6箇所）

<p>【注1】 P 2 18行目 $(710 \text{ m}^3/\text{s} \text{ 取水量} < 710 \text{ m}^3/\text{s})$</p>
<p>【注2】 P 2 22行目</p> <p> $\left. \begin{array}{l} \text{計画ダム流域} \quad Q = A (\text{km}^2) \times Y (\text{mm/A}) \times f \div 3.6 \\ \text{換算} \quad Y (\text{mm/A}) = 85 \times 3.4 \div 0.75 \times 3.6 = 120 (\text{mm/A}) \\ \text{府提示値} \quad Q = 3.4 \times 120 \times 0.75 \times 3.6 = 85 (\text{m}^3/\text{s}) \end{array} \right\}$ </p>
<p>【注3】 P 3 9行目</p> <p> $\text{注} \{ (85 - 10 \text{ (ダム放流)}) \times 0.68 = 51 (\text{m}^3/\text{s}) - \text{治水基準地点} \}$ </p>
<p>【注4】 P 3 12行目</p> <p> $\left. \begin{array}{l} \text{流域} \quad Q = A (\text{km}^2) \times Y (\text{mm/A}) \times f \div 3.6 \\ \text{計画ダム} \quad Q = 3.4 \times 120 \times 0.75 \div 3.6 = 85 (\text{提示}) \\ \text{父鬼川} \quad Q = 20.61 \times 120 \times 0.75 \div 3.6 = 51.5 \\ \text{府提示の大川橋基本高水流量} \quad 400 \text{ m}^3/\text{s} < 600 \text{ m}^3/\text{s} \end{array} \right\} \text{合計 } 600 \text{ m}^3/\text{s}$ </p>

【注5】 P 3 15行目

流域 $Q = A(\text{km}^2) \times Y(\text{mm/H}) \times f \div 3.6$

注 { 計画流量 $Q = 3.4 \times 50 \times 0.75 \div 3.6 = 35.4$ } m^3/s

{ 父鬼川 $Q = 20.61 \times 50 \times 0.75 \div 3.6 = 214.6$ } 250

{ 大川橋周辺流下能力 $250 \text{ m}^3/\text{s} = \text{降雨強度 } 50 \text{ mm/H}$ 対応 }

【注6】 P 3 20行目

注 { $Q(\text{m}^3/\text{s}) = 3.4 \times 56 \times 0.75 \div 3.6 = 40$ } 内 $10 \text{ m}^3/\text{s}$

{ $Q = 20.61 \times 56 \times 0.75 \div 3.6 = 240$ } 合計 $250 \text{ m}^3/\text{s}$

【注7】 P 3 25行目

注 { $Q(\text{m}^3/\text{s}) = 3.4 \times 86.9 \times 0.75 \div 3.6 = 62$ } $(-)$ 10

{ $Q = 20.61 \times 86.9 \times 0.75 \div 3.6 = 373$ } $(+)$ $10 = 383$

{ $383(\text{m}^3/\text{s}) - 250(\text{大川橋流下能力}) = 133(\text{m}^3/\text{s})$ } 超過